

## アマゾンと日本移民

丸山 浩明

## はじめに

かつて多くの日本人がアマゾン開拓に挑んだことを知る人は少ない。私が初めてアマゾンの日本人移住地を訪れたのは、まだ大学院生だった一九八六年のことである。真夜中にバスでアマゾン河口域の大都市ベレン（パラ州の首府）を発ち、未舗装の台地を駆け抜け、大河を船で渡り、全身埃まみれでようやく昼頃に辿り着いたのは、アマゾン最初の日本人植民地トメアスー（旧アカラ）であった。

熱帯林の真ただ中に忽然と姿を現したその町は、幼い頃に私が過ごした日本の農村を彷彿とさせるもので、まるでタイムスリップしたかのような不思議な感覚に囚われたことを今も鮮明に覚えている。ふと立ち寄った食堂は板張りの日本式家屋で、壁には日本語のメニューがたくさん貼られていた。そして、日本語しか話せないというおばあちゃんが、懐かしい日本からの突然の来訪者を温かく迎えてくれた。私はアマゾン奥地での予期せぬ日本との出会いに心を強く揺さぶられると同時に、この時初めて日

## アマゾンと日本移民（丸山）

本移民に対する興味・関心を喚起された。

それからはや四半世紀が過ぎ、現在私はアマゾン各地の日本人移住地を再訪して、移民とその子孫のライフヒストリーを記録する作業が続いている。そこで本稿では、アマゾン移民とはいったい何だったのか、その輝かしい功績と大きな犠牲の双方に着目して考えてみたい。

## 一、アマゾン開発に挑んだ外国移民

アマゾンは古来インディオの居住域であり、植民者ポルトガル人の入植が活発化するのは一七世紀以降のことである。すなわち一六二一年、ポルトガルはアマゾンへの植民を企てるフランス、イギリス、オランダの侵入を防ぎ、未開の北部地方を開発する目的で、アマゾンに初めて王室直轄領のマラニオン州を設置した<sup>1)</sup>。その後一八二二年にブラジルがポルトガルから独立し、翌年にグランパラ県がここに新設されるまで、アマゾンはブラジル総督府の影響を直接受けないポルトガル王室の直轄領として長く存続した。

約三世紀に及ぶポルトガルの植民地時代（一五〇〇～一八二二年）を通じて、アマゾンは原始的な焼畑農業や採集経済に依存するブラジルの後進地域であり、食料や生活必需品の多くは輸入に頼らざるを得なかった。このような状況は帝政時代（一八二二～一八八九年）を迎えても変わらなかった。アマゾン諸州の政府は、近代的農業の実現による自給体制の確立を企図するが、原始的な焼畑農業や採集経済に長く慣れ親しんだ住民たちにはとうてい実現が不可能であった。そこで州政府が白羽の矢を立てたの

が、農業経験をもつ外国移民であった。一八七五年にはヨーロッパ移民六八名が初めてベレンに到着し、以後一八七七年までに三六四名が入植したという。しかし、彼らの営農実績は芳しくなく、結局二年後にアマゾンに残ったのは入植者の三分の一（一一七名）に過ぎなかった〔若槻一九七三、二二―二三頁〕。また南北戦争後のアメリカからも、勝者である北部アメリカ人（ヤンキー）への反感を募らせ、解放された黒人奴隷と生活を共にすることを好まない南部アメリカ人たちが、まだ奴隷制が残るブラジルでの綿花プランテーションの再開を夢見て移住した〔Harter 2000〕。その正確な移民数は不明だが、二〇〇人とも二万人とも言われている。このうち、アマゾン中流のサンタレンには二〇〇人が入植したといわれるが〔Moog1993:31〕、彼らもまたアマゾンに定着することはなかった。

その後、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、マナウス（アマゾナス州の首府）を中心にゴム景気が到来すると、アマゾンは世界一の天然ゴム産地として一躍世界の檜舞台に躍り出た。しかし、アマゾンのゴム産業は一九一二年以降、東南アジアで興隆したゴムプランテーションとの競争に敗れて衰退し、地域経済は一九二〇年代以降急速に疲弊して多くの住民がアマゾンを離れた。こうした中、原始的な採集経済からの脱却とそれに代わる近代的農業の導入こそがアマゾン再生の切り札であるとの認識が再び高まり、今回は欧米移民ではなく、すでにサンパウロ州などで農業者としての高い資質が認められていた日本移民に白羽の矢が立った。パラ州知事のディオニジオ・ベントス（Dionysio Bentes）は、一九二三年にリオデジャネイロの日本大使館を訪れ、就任間もない田付七太駐伯大使に、できる限りの便宜供与を行うので勤勉な日本人にパラ州を開拓して欲しい旨要請した。

## アマゾンと日本移民（丸山）

しかし、時は日伯両国でナショナリズムの高揚期を迎えていた「丸山二〇一三、三一―四頁」。すなわち、日本では一九二四年の帝国経済会議において、人口問題の解決策として移民が最善の方策であり、移住先には南米ことにブラジルが最適であると確認された。そして、一九二五年からは渡航費と移民取扱手数料の全額を国庫負担する移民保護奨励策が実施され、国は一気に国策移民の送出へと舵を切った。それとともに日本の移民政策も、それまでの「出稼ぎ移民」（Ⅱ人）から移植民のための「移住地」（Ⅱ土地）建設へとその関心が大きく転換した。一九二九年には拓務省が設置され、国が中心に海外移植民事業を推進する体制が整備された。

一方、ブラジルでは一九二三年に黒人の入移民禁止と黄色人の入国制限を謳った「レイス移民法案」が連邦下院に提出され、「黄禍論」を唱えて排日運動を煽動する賛成派と、コーヒー農園の労働力として日本移民が必要なサンパウロ州選出議員を中心とする反対派との間で、国を挙げて激しい論戦が繰り広げられた。

移民をめぐる日伯両国の思惑が相反する中、田付大使はサンパウロ州への日本移民の極度な集中が排日気運を高揚させる一因であると考え、未開なアマゾンへ日本移民を分散させることで「黄禍論」に対するブラジルの危惧を払拭して排日運動の緩和を図ろうと思慮をめぐらせた。<sup>①</sup> こうした中、一九二五年にはパラ州政府より、一九二六年にはアマゾナス州政府より、相次いで田付大使に対して日本移民受入れの申し入れが行われた。それは両州とも広大な州有地を日本移民に無償で譲与するという、一般にコンセッション (concessão)<sup>②</sup> と呼ばれる契約締結への熱意溢れる勧誘であった。排日政策の是非をめぐ

り賛否両論の激しい攻防が続くブラジル連邦議会を尻目に、アマゾンでは日本移民の受入れに向けた準備が進められていた。ポルトガル王室の直轄領だった植民地時代同様、アマゾンは同じブラジルでありながら未だに別世界のようなであった。

## 二、日本人によるアマゾン開拓

わが国では一九二〇年代における移民送出の国策化とともに、それまでの「出稼ぎ移民」だけではなく、「定住植民者」の送り出しにも国や企業などの民間組織が積極的に関与するようになった。パラ州への移民送出を主導したのは、かねてよりブラジルの綿作に関心を寄せていた鐘淵紡績株式会社（武藤山治社長）であった。同社は一九二六年に取締役の福原八郎を団長とする調査団をアマゾンに派遣し、肥沃な土地の選定や境界の画定作業に当たった。そして一九二八年には、鐘淵紡績株式会社が株式の四分の一を引き受けて「南米拓殖株式会社」（以下南拓）を設立し、社長には福原八郎が就任した。福原は同年、パラ州政府と約百万町歩のコンセッション契約を締結し、一九二九年には現地法人「*Companhia Niponica do Plantação do Brasil*」を設立して、「アカラ植民地」「モンテアレグレ植民地」「カスターニャール米作試験場」の経営に乗り出した。アマゾンで最初の植民地入植者（先遣隊員などは除く）となった第一回移民四三家族（単独渡航八名を含む一八九名）は、一九二九年七月二四日に神戸港を発ち、九月二二日に「アカラ植民地」に入植した。その後一九三六年までの入植者総数は、三五二家族二一〇四名に上った。「トメアスー植民地寫真同好會編一九五五、一五一―一七頁」



写真1 上塚司校長と斧を携えた高拓生（アマゾン高拓会所蔵）

一方、アマゾナス州への移民送出の端緒を開いたのは、田付大使の指示を受けて一九二七年三月に同州と百万町歩のコンセッション契約を締結した、実業家の山西源三郎と大使館附嘱託の粟津金六であった。しかし、彼らには契約で定められた調査団の派遣や現地会社設立の目処が立たず、本契約の権利は粟津と同郷（熊本県・同窓（神戸高等商業学校）で、当時衆議院議員でもあった上塚司<sup>6</sup>に委託された。上塚は政治家としての人脈を巧みに利用し、一九二八年八月には外務省から補助金を受けて第一次調査団（粟津団長）をアマゾンに派遣し、翌年一月までに三〇万町歩の土地選定を完了した。さらに一九三〇年六月には外務省支援の下、自らが団長としてアマゾンに渡り、残り七〇万町歩の土地選定

を完了すると同時に、パリンチンス郡の民有地を購入してヴィラ・アマゾンニアと命名し、そこにアマゾン開拓の拠点となるアマゾンニア産業研究所（後のアマゾンニア産業株式会社）と附属実業練習所を創立した。

さらに上塚は、アマゾン開拓の第一線で活躍する「国土」たる矜恃をもった人材の育成を行うため、一九三〇年に国土館高等拓植学校を東京に開設し、自ら校長としてその陣頭指揮を執った。その後一九三二年には、満蒙開拓の人材養成に方向転換を図る国土館と袂を分かち、神奈川県生田村（現川崎市多摩区）に日本高等拓植学校を新設して移植民教育に尽力した。学生たちは一年間、全寮制のもとでポルトガル語、農業、畜産、土木建築、測量、植民政策、南米地歴、柔剣道、馬術、農業実習などを学び、アマゾン開拓に挑む意義や心得を深く心に刻み心身を錬磨した。そして卒業と同時にアマゾンへ渡り、アマゾンニア産業研究所の附属実業練習所でさらに一年間の実地訓練を受けた後、正真の開拓者としてアマゾンに巣立っていった。こうして一九三一年（第一回卒業生）〜一九三七年（第七回卒業生）にかけて二四三名の高拓生（同校卒業生の通称）がアマゾンへと移住した（写真1）。

このほかにも、戦前には日本の企業や移植民学校が中心に推進したアマゾン移民があった。アマゾンニア州のマウエスには、熱帯作物グアラナ（guarana）の有望性を確信した大石小作（元鐘紡技師長）が、一九二八年九月に沢柳猛雄らとアマゾン興業株式会社を設立した。彼は会社設立前の八月に社員七名を伴い先遣隊としてマウエスに入り、一〇月にアマゾナス州政府と二万五千町歩のコンセッション契約を締結する前に、四万五〇〇〇本のグアラナを新植した。そして、一九三〇年の第一回移民から翌年の第

アマゾンと日本移民（丸山）

三回移民まで、単身者も含めて一九家族一二七名がマウエスに入植し、グアラナ栽培に取り組んだ。

また一九一八年に海外植民学校を東京に創立し、植民を目的とする人材育成に尽力した校長の崎山比佐衛は、一九二七～一九二九年の南米視察旅行から帰国後、風光明媚ですつかり気に入ったマウエスに分校設立を計画した。そして、一九二九年に同校卒業生の伊藤松之助を現地に派遣し、土地の選定と入植準備に当たらせ、翌年には同校主事の今井修一が渡伯して五〇〇町歩の土地登記を完了させ、一九三二年には崎山自らが親族一〇名を伴ってマウエスに移住した。

しかし、一九三〇年代に入ると日本移民の流れはブラジルから満州へと大きくシフトし、アマゾン移民は減少していった。さらに太平洋戦争勃発に伴う日伯両国の国交断絶（一九四二年）により、ブラジル移民は完全に途絶した。日本からブラジルへ向かう戦後初の計画移民は、一九五三年にアマゾンに入植した「辻移民」から始まった<sup>①</sup>。これは高拓生らが戦前にアマゾンで普及・発展させたジュートの増産を担う労働力として受入れが認められた移民であり、時のヴァルガス大統領と親交が深かった辻小太郎の尽力により実現したものであった<sup>②</sup>。自ら調査団を派遣して土地を選定し、事前準備を行って入植した戦前移民とは異なり、戦後移民の大半はブラジル連邦政府やアマゾン州政府が経営する立地条件の悪い移住地に、当初より援助のない独立農として送り込まれた。アマゾン移民がほぼ途絶えた一九六九年までの戦後移民は、家族数一〇五六戸、単身者四三一名で、総員数は六五三五名にも上った。

## 三、アマゾン移民をめぐる言説とその評価

## (一) 移民推進派の言説と賞賛を得た日本移民

アマゾン移民は、ゴム景気の凋落で疲弊した地域経済の再生を有能な農業者と目される日本人に託したいアマゾンの州政府と、海外で高まる排日気運を払拭しつつ国策移民を送出したい日本政府の、双方の思惑が一致したために実現したものである。そのため、日本の政財界を後ろ盾にした企業や移住民学校が移民送出や移住地創設のための経営主体となり、当初より政治・外交主導で移民政策が推進された点に、それまでの移民会社を通じた「出稼ぎ移民」とは本質的な違いがある。

「国策移民」の特徴は、当時の移民送出機関のリーダーの言説にも端的に表れている。たとえば国士館高等拓植学校の校長だった上塚司は、「過去數世紀に亘り幾度か歐米人の手に依つて此の神秘境の探險は繰返された。然れ共彼等は自ら汗して原生林を開拓するに非ずして、其の求むる所は土人の金銀財寶に非ずんば、原始林中にある自然物の搾取に外ならなかつた。アマゾニアは此の如き利己的な心なき闖入者を心より嫌惡し、又此の如き貪慾なる暴君の入り来るを強き力を以て拒否してゐる。アマゾニアの大自然が求むる所のものは、此の如き狡猾なる人間の集團でなく、又現在土民の如き怠惰者でも無い。實に熱帯圏内の勞務に堪へ、勤勉にして賢明且確固不拔の精神と、朗かなる理想に燃ゆる民簇である。比の如き開拓の勇者に面する時大アマゾニアは歡呼して之を迎へ比の如き勇者の出現に依て、大アマゾニアの天地は初めて世界の樂土世界文明の中心と化するであらう。〔中略〕今や我が日出る國の民簇こそ、

## アマゾンと日本移民（丸山）

彼女が求むる戀人として、遙かの彼岸より三千歳文化の華を載せて渡り、拓き、植へ、培ひ、收め殖やさんとして其の第一歩を踏み出した。」と記している。「上塚一九三一a、一―二頁」

さらに「獨逸の學者のウンボルトは『アマゾンニアを支配する者は世界を支配する〔中略〕今後世界文明の中心地となるものは、即ち此アマゾン流域である』と叫んで居ります。亜米利加の前大統領のルーズヴェルトの如きも『二十世紀はアマゾン流域の時代であると』叫んで居ります。斯の如き立派な場所が、歐米白人種の手によって開かるゝことなく、今日に残されたと云ふことは、正に天が我が大和民族をして將來大いに世界的に雄飛せしめるが爲に特に残して置いたものではないかと考へられるのであります。」と述べ「上塚一九三一b、四〇―四二頁」、アマゾン開拓に先鞭を付けた欧米人の移殖民事業を厳しく批判する一方で、現地人と共存共榮する「地上の楽土」をアマゾンに実現することが日本民族の使命であると指摘している。

同様に、長くアマゾンに関わった外交官の野田良治は、「アマゾンニアの氣候風土は決して日本人の移植に不適當でなく、日本民族はアマゾンニアに於て繁榮し得る。否、世界の諸民族中ひとり日本人のみがアマゾンニアの大自然征服の先駆者となることができる。」「吉村一九五五、一六八―一六九頁」、「従て世界の有らゆる他の方面に於て、歐米人の為に先鞭を着けられ、常に立遅れの歎を抱ける我國人は、せめてはアマゾン流域の開発になりとも先鞭を着けねばならぬ。その準備として今より組織立ちたる調査に着手せねばならぬ。此の大寶の鍵は此所に先鞭を着くる者の掌中に落つるや疑なき所である。」と述べ「野田一九二五、五六頁」、欧米諸国に遅れぬよう国を挙げてアマゾン開発に着手すべきと世論を喚起してい

る。

これらの言説からは、当時アメリカやブラジルで高まった排日論を押さえ込み、日本の拡大主義的なイメージを払拭するためにも、欧米諸国が見向きもしない後進地のアマゾンに進んで入植者を送り出し、未開地を平和的かつ成功裡に開拓して現地人と共存共栄する「地上の楽土」を実現することで、世界に対して日本民族の偉大さと平和主義を希求する日本の姿を印象づけたいという、当時の日本ナショナリズムの理念や方針を感知できる。昭和を迎えたこの時代、巷には神秘的なアマゾンの魅力や発展の可能性を説き、日本民族の夢と威信を賭けてその開拓に挑む憂国の士となることを煽るようなプロパガンダが満ち溢れていたといえる。

そして、日本の海外発展と国益実現のための代理人としてアマゾンに送り出された移民たちは、国や民族の発展のために開拓に挑み、艱難辛苦を乗り越えてブラジル農業史に燦然と輝く偉業を成し遂げた。すなわち、アマゾンの中流域では高拓生とその家族の奮闘により、それまでインドからの輸入に頼っていたジュート（コーヒー豆などの農作物を入れる袋の原材料）を自力で生産できるようになった。また、アカラ（トメアスー）植林地では、第二次世界大戦前にシンガポールから持ち込まれた胡椒の栽培が戦中から戦後にかけて大発展を遂げた。こうして日本移民とその子孫は、それまでアマゾンでは誰も為し得なかった近代的農業の実現により、何世紀もこの地で続けられてきた原始的な農業や採集経済からアマゾンを解放したとの評価を得、偉大な農業功労者としてその名声をブラジル中に博することになった。

## アマゾンと日本移民（丸山）

（二）移民反対派の言説と埋もれた犠牲者たち

アマゾン移民が残した輝かしい成功譚の一方で、国益最優先の移植民政策が推進された結果、移民には国土たるべき忍従の生活と開拓実践が強いられ、移植民政策本来の目的でなければならぬ移民の幸福や生活の安寧がないがしろにされた感は否めない。その輝かしい成功譚に賞賛と関心が集まれば集まるほど、身を粉に開拓に挑んだ移民たちの生の声は闇に葬られてしまった。われわれは輝かしい成功譚の代償としてアマゾン移民が支払わねばならなかった大きな犠牲についても光を当てなければならぬ。

一九二〇年代後半に日本でアマゾン移住熱が高まる中、一人徹底して移民反対の論陣をはったのが、ブラジル日伯新聞社主の三浦鑿であった。彼は福原八郎を団長とするアマゾン調査団が派遣された翌年、自ら九カ月間に及ぶアマゾン実地踏査を敢行した<sup>13</sup>。そして一九二八年一月に自身が通信員を務めていた大阪朝日新聞に「大アマゾン記 日本人最初の探険」（全二二回）を連載し、実体験に基づいてアマゾン移民の問題点や危険性を指摘しながら、次のように日本の移植民政策を糾弾した。

「大體素人が二度アマゾンを覗いたといふだけで人命に關する移民問題を決定するなどは輕率至極で、それをまた政府が移民問題緩和に是非必要だとあと押しするのだからやり切れない。素質不良のところへ移民を送つても、それは必然失敗するだけで、問題緩和の効果なきのみか、失敗した雙方がいやな思ひをするだけだ。「中略」移民はどこまでも移民本位で考へねばならず、すなはち本國にあるよりも、ヨリ良き生活を送り得ることが先決條件で、これ以外に移民の榮える理由はない。いかにウソ八百を並べ、無理に押込んでみても、それが本國の生活より悪くまた周圍の移住地より悪ければ決して落付くも

のでない。「中略」何人も良い土地をほつておいて悪い土地から先に手をつけるなどはやらない。これは人類移動の経済的原則だ。アマゾン移民はこれに逆行して、それもよい、たゞ列國環視の中で物笑ひになるだけが遺憾だ。」「文明國民として健全な發展を遂げ得る見込ある所なら移民をやるが、さもない所へは大切な日本人はやれないという建前がなければならぬ。」と、ドイツやイタリアの移民政策も引き合いに出しながら、アマゾン移民をめぐる当時の日本の空騒ぎを戒め、移民政策に対する日本の見識の低さを憂慮している。

しかし、「我同胞のために残された日本新植民地」「無限の富を蔵する新天地」「南米の理想郷」といった国威発揚的な言説を弄し、アマゾンへの海外雄飛を煽る者たちが圧倒的多数を占める中で、三浦のように移民個人の命や生活にまず思いを寄せ、人間としての幸福という唯一無二の条件だけにこだわってアマゾン移民の是非を問うた者はほとんど見当たらない。事実、三浦のアマゾン移民反対論が完結すると同時に、その翌日には「南米における新移民團の鍵」という戸田正三（京大教授・医学博士）の記事が掲載された。そこには「衛生を武器として寧ろ有病地帯に進むべし」の見出しが踊り、「白人が健康維持難、又は風土服合難を來して、我々が果してその通りであるか否かは大きな疑問である。衛生學上のいはゆる服合難なるものは人種の個性とその風俗とによつて大變に違つて來るものである。「中略」大自然にヨリよく適つた素質の者が同一程度の文明を携へて進めば勝を制すること比較的容易なわけである。「中略」白人が好んで進むやうな所は我々には既に八方塞がりである。要は彼等が好まないところに我々獨特の力を持つて新機軸を開いて行かねばならぬことゝ思ふ。虎穴に入るの勇氣と、そこに進入

## アマゾンと日本移民（丸山）

するだけの用意とが整へば敢て躊躇せなくともよいではないか。」と、大言壮語ともとれる風土病回避への強い自信が表明されている。

国策移住に警鐘を鳴らし、「移民はどこまでも移民本位で考えねばならない」と説いた三浦の意見は一顧だにされず、一九三〇年代に入るとアマゾン移民が次々と送り出された。しかし、移民を取り巻く環境は日増しに厳しくなっていた。すなわち一九三一年の満州事変を契機に日本の関心は一気に満蒙開拓へと傾き、アマゾン開拓に対する無理解や無関心がすぐに資金援助の滞りなどを通じて、アマゾン各地の植民地経営に深刻な打撃を与えることになった。現地では資金難から植民地が崩壊したり、経営方針をめぐる日本側との対立から移民がブラジル南部へ転出したりする事態となった。さらに、日本の軍国主義化に警戒感を強めたブラジル政府は、一九三四年の新憲法公布以降、植民地に集住してブラジル社会に同化しようとしめない日本移民に対してさまざまな規制強化を断行した。州政府が独断で一万町歩以上のコンセッション契約を締結できなくなる法改正などは、まさに日本のアマゾン移民を念頭に置いた排日政策であった。

さらにアマゾン移民を窮地に追い込んだのが、「日本人の素質と文明力をもってすれば克服できる」はずであったマリアの猖獗である。現在もトメアスー（旧アカラ）には『アカラ植民地英霊録』と呼ばれる古い巻物が大切に保管されている。これは一九二九〜一九五五年までのアカラ植民地における日本人の詳細な死亡記録で、南拓の病院関係者が書き残したものとみられる。そこには合計二八一名に上る物故者の原籍（出身都道府県）、家長との続柄、発病年月日、病名、死亡年月日と時間、死因の

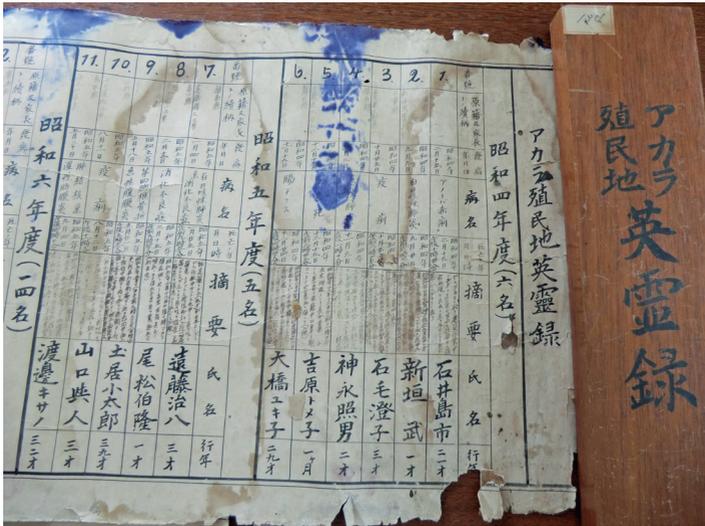


写真2 『アカラ殖民地英霊録』（2010年、筆者撮影）

摘要、氏名、享年が記されている（写真2）。死亡者の五〇％は抵抗力の弱い〇〇九才の乳幼児や子供だが、マラリアが猛威を振るった一九三〇年代には青壮年も数多く命を落としている（図1）。死因で最も多いのはマラリアとその合併症で、一九三二年以降一九五五年までに九五名（三三％）を数える。とくに一九三六年からは、経過が悪性で適切な早期治療を逃すと容易に死に至る悪性マラリアが多発し、合併症の黒水病による腎機能障害で「赤小便」を出して急死する者が増えて、アマゾン各地の日本人植民地を震撼させた。このほかに母体の過度な労働による早死産、開拓作業時の不慮の傷害、赤痢や疫痢・肺結核といった感染症などによる死亡者もここには数多く記録されている（写真3）。ブラジルでは、一九一六年にサンパウロ州の平野植民地でマラリアが猖獗し、多数の日本人が犠牲となった反省から、日本人医師

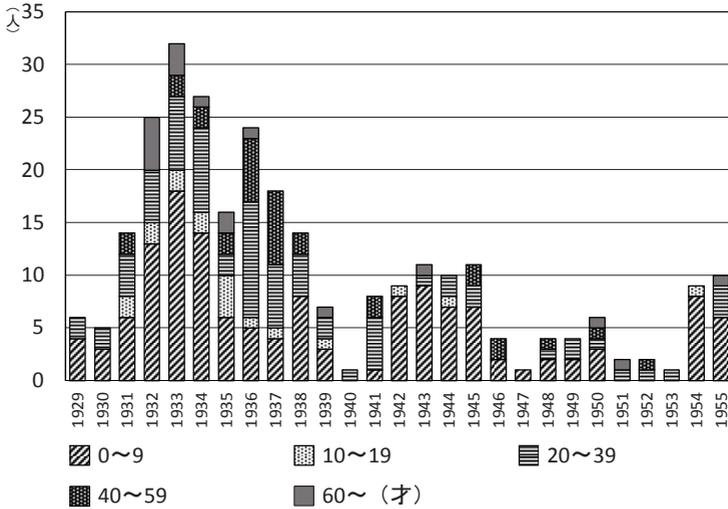


図1 アカラ植民地における日本人死亡者数の推移  
[アカラ植民地英霊録より作成]



写真3 ヴィラ・アマゾニアに眠る日本人  
「ここに眠る アキオ・オチ」と刻まれた墓石は、わずか五カ月  
で亡くなった乳児のものであった。(2011年、筆者撮影)

らによるマラリア研究が進められてきたが、その教訓と成果がアマゾンで十分に活かされることはなかった。

このような一九三〇年代のアマゾン移民をめぐる日伯両国の厳しい政治・社会状況、忍び寄るマラリア猖獗への恐怖、まったく先が見えない人生への不安や焦りなどの中で、移民たちの夢や理想も崩れていった。彼らは日本で叩き込まれた教育とアマゾンの現実とのあまりに大きな乖離に戸惑い、怒り、煩悶した。一九三四年に現地視察でアマゾンを再訪した上塚司校長を出迎え、そして帰国を見送った高拓生の一人は、その時の心境を次のように吐露している。

「校長は」白いヘルメットに黒い靴とゲートル、白い開襟シャツに身を固めた、アングロサクソン植民者風の格好で、財団法人、会社設立、正義の通る社会、大和民族による理想社会の建設についていつもの熱弁をふるった。財団法人とか会社設立などということは、アマゾンに生きていくわれわれとはあまり密接な関係があるとは思えなかった。なぜそうなのか。しいていえば、校長には校長の世界があるが、われわれは自分の世界に向かってみずから運命を切り開いていかなければならないことを真剣に考えはじめていた、ということになるのか。ここは、広い大地なのだ。」「安井一九九八、九八―九九頁」

「われわれは乗り気ではなかったが、しぶしぶ炭で『化粧』した姿のまま山を下った。「中略」校長は別れの挨拶などそっちのけで、またもや会社設立と大理想の突撃ラップである。われわれは歓送の儀式がすむやいなや、湖水へ飛び込んだ。そして満々と広がる水のなかで、校長の説く会社設立や大理想を肺の中の炭の粉といっしょに洗い流してしまった！校長は手塩にかけた四回生の心中がよくわかってい

## アマゾンと日本移民（丸山）

ないらしい。「中略矛盾を感じとった先輩たちは、もうここには残っていない。四回生の大部分は縁あって校長と出会い、国家民族の将来を担う心意気で南米大陸まで来たのだが、校長の理想とみずからの生きる道とがちがうように実感していた。いまは渡り鳥が途中で羽を休めている心境で、やがて広い天地へ飛び立たなければならない、と思っている。」〔安井一九九八、一〇四頁〕

この言説には、はるばる日本からやって来て相変わらずアマゾン開拓の夢と理想を大言壮語する恩師と、今はその言葉に奮い立つこともなく立ち尽くす弟子、自ら批判したはずの西洋人植民者風の身捲えで登場した恩師と、正真の植民者となり山から下りてきた灰まみれの弟子という、相容れない二つの人間像が見て取れる。野口はこのような状況の背景に、当時拓務省の意向に沿う形で進められていた植民会社（アマゾニア産業株式会社）の設立に対する移民たちの批判や反発があったとみる。すなわち、資金の絶対的・慢性的な不足の中で、国からの助成金が配当される植民会社の設立は、経営者としての上塚にとって事業を躍進させる重要な転機であった。一方、移民にとって植民会社の設立は、拓務省による移殖民事業の完全な国策化を意味し、それは同時に教育者としての上塚が理想に掲げてともに取り組んできた「模範植民地」建設の夢がつかいえることを意味した。「この意味で会社の設立は、躍進の時期への移行の象徴ではなく、上塚事業の変質を示す『分岐点』であった。」と野口は総括している。〔野口一九九三、二三五頁〕

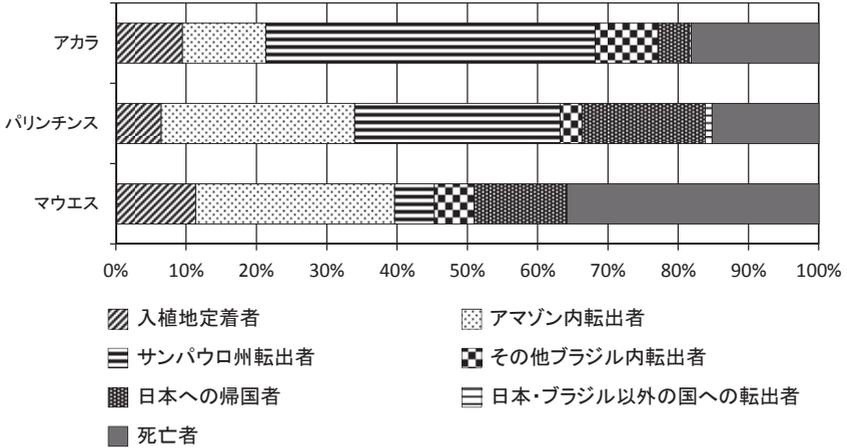


図2 戦前の日本人植民地における移民の定着・転出状況  
〔池田 1965 をもとに作成〕

#### 四、移民の定着・転出状況からみたアマゾン移民の実像

ここではアマゾン移民の全体像を、彼らの定着・転出状況に着目して考察する〔Maruyama 2013〕。図2は、第二次世界大戦前にアマゾンに建設された三つの日本人植民地における移民の定着・転出状況である。アカラ植民地では、一九二九～一九三六年までに入植した三八〇名（家族移民の戸主および単独青年四四一名のうち、行方不明者六一名を除いた数）のうち、アマゾンにとどまったのは全体の約二一％で、このうちアカラ植民地に定着した者はわずか九％に過ぎない。一方、全体の六割に当たる移民はアマゾンを離れ、主にサンパウロ州（四七％）に再移住しており、日本に帰国した者も約四％見られる。残りの一八％は、調査時点での死亡が確認されている。

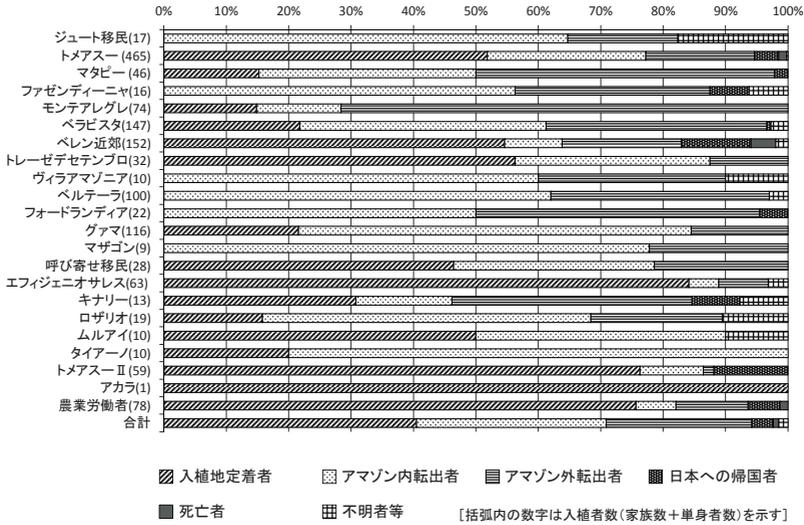
## アマゾンと日本移民（丸山）

一方、学卒者（高拓生）を中心に若者が数多く入植したパリンチンスでも、移民の定着・転出状況はアカラ植民地と大きく変わらない。一九三一―一九三九年までの入植者四二一名（高拓生とその妻および家族移民四六八名のうち、行方不明者四七名を除いた数）のうち、アマゾンにとどまったのは全体の三四％で、このうちパリンチンスに定着した者は約六％に過ぎない。ここではジュート生産を行うために移民がアマゾン河畔の各地に分散居住しなければならなかったため、アカラ植民地に比べて移民のアマゾン残留率は高いものの、当初の入植地残留率は著しく低い。一方、全体の五割に当たる移民はアマゾンを離れ、主にサンパウロ州（二九％）に再移住している。また、日本への帰国者が約一八％と群を抜いて高いことは、高拓生の多くが日本で中流以上の家庭の子弟であったことを裏付けている。死亡者は一五％で最も少ない（図2）。

またアマゾン川支流の奥地に建設されたマウエスでは、経営主であるアマゾン興業株式会社の資金不足などからすぐに植民地経営が行き詰まり、移民たちが次々と四散した。さらに一九三三年頃からここでもマラリアが猖獗して多数の犠牲者が出た。こうしたマウエス植民地の厳しい現実、移民の定着・転出状況にも顕著に反映されている。一九二八―一九三二年までの入植者八七名（社員や家族移民の戸主ならびに単独青年）のうち、その約四割にも相当する三四名が行方不明である。定着・転出状況が判明した五三名についてみても、アマゾンにとどまった者は全体の四〇％で、このうちマウエスに定着した者はわずか一一％である。彼らは経済的にも社会的にもアマゾンにとどまらざるを得なかった人々といえ、実際にその多くは現地人と結婚して土着化していった。アマゾンを離れた移民は全体の約二五％で、

# 史 苑 の 窓

史苑（第七四卷第二号）



**図3 戦後の日本人植民地における移民の定着・転出状況**  
[奥田 1970 をもとに作成]

このうちサンパウロ州への再移住者は約六%、日本への帰国者は一三%であった。また死亡者は三六%と高い値を示している(図2)。

このように、戦前アマゾン移民の定着・転出状況からは、戦後(一九六〇年代前半頃)まで当初の入植地に定着していた移民は全体の約一割以下に過ぎず、その大半は入植地を離れてアマゾンやブラジル南東部の都市部へ転出したことがわかる。そして、このような移民の際だったアマゾン転出率の高さは、そのほとんどが連邦政府や州政府が経営する立地条件の悪い移住地に、当初より支援のない独立農として入植させられた戦後アマゾン移民についても同様に認められる。

図3は、一九五二年の「ジュート移民」から一九六九年末までにアマゾン各地の移住地に入植した、一〇五六家族と単身者四三一名

アマゾンと日本移民（丸山）

（計一四八七名）の定着・転出状況である。そこには移住地や移民形態（独立農か農業労働者か）による顕著な差異が認められるものの、戦前移民同様、当初の入植地に定着している者の割合は総じて低く、全体の平均でも約四割にとどまっている<sup>18</sup>。入植地からは転出したものの、アマゾン内にとどまった移民は全体の約三割で、両者を合わせたアマゾン残留率は約七割である。一方、アマゾンからの転出者は日本への帰国者も含めて全体の約三割に達している。

### おわりに

わが国では、艱難辛苦を乗り越えて農業者として成功するアマゾン移民の逞しい姿が、数多くの小説や映画の中で繰り返し描出されてきた。一般に「棄民」のイメージで語られがちな日本移民の中でも異色な存在といえる。しかし、アマゾン移民が手にした成功譚ばかりに目を奪われ、あだ花を咲かせた多くの移民たちに目を向けないのでは、アマゾン移民の本質を見抜くことも、歴史から未来への教訓を学びとることもできないだろう。

アマゾン移民を、国家の政治的役割を担うべき存在と見るか、あくまで個人の幸福を追求すべき存在と見るかで、当然その評価や解釈も異なる。しかし、少なくとも戦前・戦後のアマゾン移民の動向を全体として捉えるとき、その際だった入植地定着率の低さや、圧倒的多数の転出・物故者の存在は、国策として進められたアマゾン移民の問題点を露呈こそすれ、その成功を実証するものとは言い難い。アマゾン移民の成功譚は、あくまで入植地に踏みとどまった一握りの移民たちの孤軍奮闘の賜であり、国が推

し進めた移民政策に対する評価とは別物でなければならない。<sup>⑩</sup>

それではなぜ、国の政策的・財政的な支援を受けて用意周到に計画されたはずのアマゾン移民が、膨大な転出者や犠牲者を生み出す結果になったのだろうか。その答えは、移民の生活や幸福よりも国家の思惑や大義名分がまずは優先された、移民送出当時の日本の時代的風潮に求められるだろう。すなわち、移民を煽る夢や理想の美辞甘言、大言壮語の嵐の中で、果たして移民の生活を保証できる信憑性の高い現地調査が本当に実施できたのか、詳細な科学的検証が必要である。さらに移民が国家間の外交案件である以上、ホスト国側の視点からの検証も不可欠である。すなわち、ブラジルはいかに日本や日本人を捉え、いかなる思惑と判断のもとに移民の導入を進めようとしたのか、対日外交戦略の観点から日本移民がアマゾンで置かれた状況を検証する必要がある。日本人のアマゾン移民史を多角的に再検討するためには、まだまだ残された課題も多い。私のアマゾン通いもまだ続きそうである。

### 註

- (1) その後同州は、一六五四年にマラニオン・グランパラ州(首府サンルイス)、一七五一年にグランパラ・マラニオン州(首府ベレン)と名前や首府を変更し、一七七五年にはマラニオン・ピアウイ州とグランパラ・リオネグロ州の二つに分割された。
- (2) 佐藤(一九六四・二五三頁)は、南北戦争後のアメリカ移民をおよそ三八〇〇人とし、その中の四〇〇人がサントレンに定住したと記している。
- (3) 遠藤(二〇〇八、二〇〇九)は、国策としての南米移民のねらいが、人口や貧困といった漠然とした問題よりも、国内の「赤化」を防ぎ秩序を守るための反体制分子の排除(政治的安全弁としての移民)にあったと

## アマゾンと日本移民（丸山）

論じている。

- (4) 田付大使は排日気運が高まる中、「我同胞の直接利害関係上より考察するも、聖州以外に其發展地を求め亦急務たるを免れず」との思いから性急にアマゾン移民を推進しようとした。当時、リオ公使館附だった粟津金六は、一九二五年四月頃の話として、田付大使は壁に掛かったブラジル大地図を眺めアマゾン流域を指差しながら「こんな廣大な未開地方に日本移民を入れたら、排日論も、日本移民入国制限法案も、吹き飛ばされて仕舞ふだらうね」と笑いながら語ったと伝えている。「パウリスタ新聞社一九六〇、五二頁」
- (5) 一定期限内に土地の調査を行い、指定された面積内の土地を選定して境界を画定することを条件とする土地の無償譲与のこと。
- (6) 上塚は衆議院議員を七期務めたほか、高橋是清の大臣秘書官なども歴任した大正・昭和期の政治家である。
- (7) 実際、国土館高等拓植学校の設立申請書の目的には、「南米ブラジルニ發展セントスル国土的人材ヲ養成ス」と記されていた。「熊本二〇一一、五一頁」
- (8) 国土館高等拓植学校では、入学志願時に「入学可許サレ候節ハ卒業後直ニブラジル共和国ニ渡航シ、更ニ一ケ年ノ課程ヲ修業致サシムベク此段承諾致候也」と記された「渡航承諾書」の提出を求めており、卒業後にアマゾンに移住して一年間の実習訓練教育を受けることを義務づけていた。「熊本二〇一一、五一―五二頁」
- (9) 高拓生のほかに、アマゾンニア産業研究所の教師や職員、同行した家族移民（二二家族）など、本プロジェクトに参加した関係者は総勢三八六名に上った。[ Ikegami: 2009: 194-199 ]
- (10) 西部アマゾン日本人移住70周年記念誌編集委員会（一九九九年、三一―六頁）では、入植者総計は一一九名（二五家族七九名十单身者四〇名）とされている。
- (11) 日本移民が集住するサンパウロ州などでは、戦中は敵性国人であり、戦後も「勝ち組・負け組」抗争でブラジル社会を騒然とさせた日本人に対する反感が根強く、アマゾン地方に比べて日本移民の受入れは遅れた。
- (12) ヴアルガス大統領は一九五三年三月一五日付の連邦議会に送った大統領教書の中で、「アマゾンの如く熱帯の不健康地として、一般ヨーロッパ人により拒否されている地域において特に見受けられるのは、日本人の順応性である。この日本移民がブラジル経済に寄与した諸事業、特にブラジルをジュートの輸入より解放するために為された貢献を勘案すること」に決定した。「若槻一九七三、五二―五三頁」
- (13) 一九二七年の三浦の旅程は、サンパウロから馬やカヌー、筏を使ってベレンに入り、そこからアマゾン川の本流を遡上してマナウスへ、その後マデイラ川を遡上してポルトヴェーリヨに至り、そこからマデイラマモレ鉄道を通ってポリビアのリベラルタに到達し、さらにタウマヌ川を遡上してブラジルのアクレに到達し

た後、再びベレンまで戻るといふ過酷なもので、野宿は六五日にも及んだという。

(14) 三浦は無謀なアマゾン移民を「モルモット移民」と称し、実験動物的な移民の送り出しを非難した。彼は「国家のため、いつ死んでもいいという覚悟がある」というのは軍人の話で、アマゾン移民には通じない話だと主張したという。「松林一九七七、二二二頁」なお、三浦鑿の人となりについては、前山(二〇〇二)に詳しい。

(15) 移民の定着・転出状況は、池田(一九六五)に掲載されている各植民地の移住者名簿をもとに分析した。池田は各植民地の調査年を明示していないが、本の出版年および自序の内容から判断するに一九六〇年代前半頃の調査結果であり、その頃の実態を示していると推察される。

(16) トメアスーの入植者動向については、「入植者総数は、三五二家族(二、一〇四名)であったが、残存せるものは、九八家族(四八三名)」という慄然たる数字を示しているのである。」とある。「トメアスー植民地寫真同好會編一九五五、一七頁」

(17) 移民の定着・転出状況は、奥田(一九七〇)がまとめた詳細なデータに依拠している。

(18) 一九五三〜一九六二年に入植した戦後アマゾン移民の動向を調べた若槻も、植民地を「脱出した人は入植した人数のおよそ六〇パーセントにも上っている。」と指摘している。「若槻一九七三、五〇頁」

(19) 自らがアマゾン移民の先導者だったにも関わらず、その後日本の経営陣と対立してアマゾンから転出してしまった栗津金六は、「法人の手によつて成功した、黄麻及胡椒栽培は、単に特殊物産の生産事業の好成績を意味するもので、コレ即ちアマゾン移植民事業そのものの成功を意味するものではない。」と述べ「パウリスタ新聞社一九六〇、五三頁」、その成功は夢を追う純真無垢な若者らの強い集団力と関係があるものの、それはかなり偶然的産物で、移植民政策とは無関係との立場をとっている。

(本学文学部教授)

### 参考文献

池田 重二 一九六五 『アマゾン邦人発展史』 サンパウロ新聞社。

上塚 司 一九三一 a 「アマゾン産業研究所月報發刊に際して」『アマゾン産業研究所月報』一卷、一二頁。

上塚 司 一九三一 b 「アマゾン事情」拓務省拓務局・文部省實業學務局編纂『最近の海外移住地』所収、二二一―二七七頁。

## アマゾンと日本移民(丸山)

- 遠藤十亜希 二〇〇八 「南米に渡った日本人移民は『棄民』だったのか」『中央公論』五号、二四二―二五二頁。
- 奥田 隆男 一九七〇 「アマゾン地域戦後移住者の転出・定着状況」『移住研究』七号、七九―九二頁。
- 熊本 好宏 二〇一〇 「国土館高等拓植学校と移民教育」『国土館史研究年報二〇一〇』一 楓原』四三―七〇頁。
- 佐藤 常蔵 一九六四 『ブラジル移民史』帝国書院。
- 西部アマゾン日本人移住70周年記念誌編集委員会 一九九九 『緑 西部アマゾン日本人移住70周年記念誌』西部アマゾン日本人移住70周年記念誌編集委員会。
- トメアスー植民地寫真同好會編 一九五五 『トメアスー植民地開拓二十五周年記念寫真帳』トメアスー産業組合。
- 野口 敬子 一九九三 「上塚司と日本高等拓植学校(完結篇)」『移住研究』三〇号、一八五―二三五頁。
- 野田 良治 一九二五 『實查十八年ブラジル人國記』博文館。
- パウリスタ新聞社 一九六〇 『アマゾンニア移住三十年』パウリスタ新聞社。
- 前山 隆 二〇〇二 『風狂の記者―ブラジルの新聞人三浦鑿の生涯―』お茶の水書房。
- 松林昇治郎 一九七七 『風化する拓人の記録 三浦鑿の生涯 上巻』松林昇治郎。
- 丸山 浩明 二〇一三 『ブラジルの人種・民族と社会』『歴史と地理』六六八号、一一―一〇頁。
- 安井 宇宙 一九九八 『アマゾン開拓は夢のごとし』草思社。
- 吉村 繁義 一九五五 『崎山比佐衛傳 移植民教育とアマゾン開拓の先覺者』海外植民学校校友会出版部。
- 若槻 泰雄 一九七三 『原始林の中の日本人―南米移住地のその後―』中央公論社(中公新書)。
- Endoh, Toake 2009 *Exporting Japan: Politics of Emigration toward Latin America*, Chicago, University of Illinois Press.
- Harter, Eugene C. 2000 *The Lost Colony of the Confederacy*, Texas, Texas A&M University Press.
- Ikegami, Antão Shinobuku 2009 *A Fibra e o Sonho*, São Paulo, Editora A Gazeta Maçônica.
- Maryzama, Hiroaki 2013 *Japanese Migrants in the Amazon: Their Dreams and Reality*, Proceedings of the International Congress (Japan-Brazil Symposium on Research Collaboration, JSPS&FAPESP), 2p.
- Moog, Viana 1993 *Banderantes e Pioneiros*, Rio de Janeiro, Civilização Brasileira.